

山陰に息づく「一式飾り」の習俗（3）
— 島根県出雲市斐川町直江地区を事例として —

高橋 健司

Folkways of “Isshiki-kazari” in the San-in Region (3)
: A Case Study of Naoe, Hikawa-cho, Izumo City, Shimane Prefecture

TAKAHASHI Kenji

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）第18巻 第2号 抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.18 / No.2

令和3年12月15日発行 December 15, 2021

山陰に息づく「一式飾り」の習俗（3）

－ 島根県出雲市斐川町直江地区を事例として －

高橋健司*

Folkways of "Isshiki-kazari" in the San-in Region (3)

: A Case Study of Naoe, Hikawa-cho, Izumo City, Shimane Prefecture

TAKAHASHI Kenji*

キーワード：「一式飾り」、民俗造形、神輿の巡行（「お旅」）、「見立て」の趣向、競作、「ハレとケ」

Key Words: "Isshiki-kazari", Folk Modeling, "Otabi", Device of "Mitate", Competition, "Hare and Ke"

1. 島根県出雲市斐川町の「直江一式飾り」

1. 「直江一式飾り」の由来

「一式飾り」とは、山陰の六つの地域（鳥取県の南部町法勝寺地区と島根県の出雲市平田町、出雲市斐川町直江地区、雲南市掛合町、奥出雲町横田地区、奥出雲町下横田地区）の祭りにおいて、住民が町内毎に同種の生活道具一式を用いて制作した作品を飾る民俗造形・年中行事であり、地域で世代を超えて受け継がれ、暮らしに息づく習俗である¹。

このうち、島根県出雲市斐川町直江地区の「直江一式飾り」は、江戸時代中期に直江の豪商であった江角屋善助が創始者とされ、善助は享保の時代(1720年代)に江戸から戻る途中、駿河の国に立ち寄り、火防の守護神として有名な秋葉大権現を勧請(分霊)し、直江の東伯寺境内に社を建立したが、江角屋宅で火事があり、善助は秋葉大権現に対するお詫びのしるしとして、秋葉大権現祭礼の神輿巡行（「お旅」）の際に、店の道具で人形を作って店の前に飾ったと伝わる²。

一方、直江の東伯寺の伝承では、明治時代に入って神仏分離令が出され、東伯寺にあった秋葉大権現が平田市（現出雲市）西代町の秋葉講に移転し、それを明治の中頃に江角屋が尽力して東伯寺に戻した折に、江角屋に伝わる「一式飾り」を直江の町内各所に飾り、賑やかな祭りをして秋葉大権現を迎えたことが、「直江一式飾り」の始まりとされる³。

今も毎年7月17日に開催される秋葉大権現祭礼では、各町内の飾り宿に「一式飾り」が飾られて、17日夜には図1の神輿が各町内を巡行する「お旅」

が行われ、各町内の飾り宿では「一式飾り」で神慮を慰め、東伯寺の方丈（住職）が般若心経を唱えて火難息災を祈る法要が行われる。

この「お旅」のために、各町内の飾り宿では火消し道具の「はしご」を置いて境を作り、火たたき用の「松」を飾ることが慣例となり、「直江一式飾り」は地域の人々の信仰と深く結び付いている。

2. 近代以降の「直江一式飾り」

出雲市斐川町直江地区は、出雲大社へと続く街道に位置し、かつては商家が建ち並び、人や物資の往来で賑わった宿場町である。直江には「一式飾り」を記した古い記録は残されていないが、出雲市平田町と同様、直江にも江戸時代に上方で流行した「造り物」が伝播し⁴、それが地域に定着して「直江一式飾り」と呼ばれるようになったと考えられる。



図1 秋葉大権現祭礼の神輿の巡行（「お旅」）
(2012年 筆者撮影)

*鳥取大学地域学部地域学科

この「直江一式飾り」の創作に熱心に取り組んだ人物が、直江の西旭町原亀太郎氏(1889年～1971年)である。原氏は絵や書・彫刻を得意とし「一式飾りにも若い頃から熱心で、祭りの一と月前にもなると構想を練り得意の筆で下絵を描き、材料もあちらこちら探し集められ、「現在の飾りのように天井から針金で吊るのではなく、添え木で支える方法で下部(足)から組み立て」、「小さな皿などを貼り付ける方法でなく、壺などの大きな材料をうまく組み合わせることで素朴・質素な中にその特徴や動き表情が誠にそれらしく飾られていて、その感覚と技術がすばらしかった」と伝わる⁵。また原氏は「飾りの依頼があれば松江・出雲の陶器店や宍道・平田・遠くは三成の祭りにも出掛けて飾ったり、当時流行った直江の権現座(歌舞伎小屋)や秋の商店街売り出しには菊人形を飾られた」と伝わり⁶、「直江一式飾り」を発展させた貢献者と称えられている⁷。

一方、直江の中町の小玉元一氏は小学生の頃や終戦後の「一式飾り」を回想して、「今では殆んど陶器に統一された」観があるが、昔は「陶器の他に佛具、お茶道具、左官道具、自転車、金物、野菜、ガラス等」も用いて作品を飾り、「形、色合いを如何に活用するか工夫し飾られるのを感じて見たもの」と述べ、また「今では材料を殆んど商店で借用するか、買いつけて飾る」が、昔は「材料は町内各家庭を廻り借り集め、不足は他町内とか商店で借り」、作品を「飾り終えてからの出来映を見ながらお神酒をパイやるのが楽しみであった」とする⁸。そして小玉氏は、昔は飾り宿を町内で「順送り」で受け持ち、飾り手が不足の時には「他町内の方に請け負ってもらったり、時には平田の方をお願いした」が、「現在では家順というわけにもゆかなくなり」、飾り宿が「車庫とか屋台」になりつつあると、「直江一式飾り」の変遷について触れている⁹。

こうした証言から、かつては原氏が平田で作品を飾ったり、反対に平田の人が直江で作品を飾ったりと¹⁰、「一式飾り」の地域間の交流が盛んであったことが窺われ、平田と直江の両地域が互いに刺激し合っ「一式飾り」が活性化したと言えよう。

II. 「直江一式飾り」の「見立て」の趣向

近年より「直江一式飾り」は、7月17日に行われる秋葉大権現祭りと翌18日に行われる金刀比羅神社祭礼を合わせた「なおえ夏祭り」で飾られるようになり、祭りの期間中、直江地区の12自治会(町内会)の作品が、各町内の飾り宿に展示される¹¹。

また、「なおえ夏祭り」の前日の7月16日には、

一式飾り審査会(作品コンクール)が開催され、各町内が競い合う¹²。この審査会は、各町内の飾り手が会員の直江一式飾り保存会が主催し、保存会は「直江一式飾り」の伝統の継承に力を入れている¹³。

現在、「直江一式飾り」の作品は、すべて陶器一式で制作され、多種多様の陶器を物語の主人公などに見立てている。その中でも陶器のカエルの置物を用いた作品は印象的で、観客の人気を博している。

そこで、陶器のカエルを使った「直江一式飾り」の作品を見ると、まず図2の「一寸法師」は、直江の西南町の2012年の作品で、よく知られた昔話をテーマに、鬼に飲み込まれた一寸法師が、縫い針の刀で鬼の腹を刺し、鬼の口から飛び出す場面を造形し、天井から針金で一寸法師を吊るしている。この作品の鬼の大きく開けた口は、図3のように底部を向かい合わせにした2体のカエルで見立て、敢えてカエルの置物の内側を見せる趣向が奇抜である。

次に図4の「孫悟空」は、直江の中町の2015年の作品で、映画化されて話題の「西遊記」をテーマに、孫悟空が筋斗雲に乗って滑空する姿を造形している。この作品の孫悟空の顔は、図5のようにカエルを上下反対にして見立て、また孫悟空の両拳も小型のカエルで見立てて、作品の随所に巧みな「見立て」の趣向を凝らしている¹⁴。

続いて図6の「美女と野獣」は、直江の西本町の2017年の作品で、同年に上映された話題の映画の中で美女と野獣が踊る場面を造形している。この作品の野獣の顔は、図7のように大小のカエルを組み合わせで見立て、その落差が観客の笑いを誘う¹⁵。

最後に図8の「須佐之男命 八岐大蛇退治」は、コロナウイルスの流行で祭りが中止になった2020年に、各町内の代表が直江一式飾り館に飾った作品である。例年であれば町内毎に制作していた飾り手が直江一式飾り館に集まり、コロナウイルスをオロチに見立て、その退散を祈って協同制作した。この作品のオロチの頭も、図9のように大小のカエルで見立て、それを天井の梁から針金で吊るして、躍動感のあるオロチを造形している¹⁶。

このように陶器のカエルは、想像力を働かせば様々な生き物に見立てることが可能で、「見立て」の趣向は無尽蔵と言える。それゆえ飾り手は新たな趣向を凝らそうと懸命に知恵を絞って創作に励む。

それは前述の小玉元一氏が「形、色合いを如何に活用するか工夫し飾られるのを感じて見たもの」と語ったように、「直江一式飾り」の「見立て」の趣向は観客を魅了し、また新たな趣向を見ようと観客は「なおえ夏祭り」を心待ちにする。



図2 「一寸法師」(2012年 筆者撮影)



図3 カエルで見立てた鬼の顔(2012年 筆者撮影)



図4 「孫悟空」(2015年 筆者撮影)



図5 カエルで見立てた孫悟空の顔(2015年 筆者撮影)



図6 「美女と野獣」(2017年 筆者撮影)

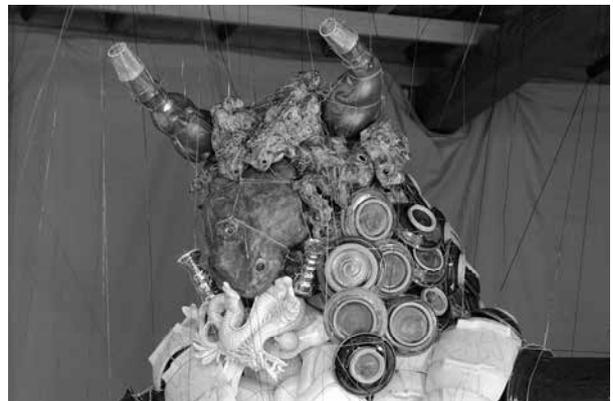


図7 カエルで見立てた野獣の顔(2017年 筆者撮影)



図8 「須佐之男命 八岐大蛇退治」(2020年 筆者撮影)



図9 カエルで見立てたオロチの頭(2020年 筆者撮影)

Ⅲ. 「直江一式飾り」の趣向の進化

直江地区では図10の「はんど瓶」と呼ばれる茶色の大きな水瓶が、軒先によく置かれている。「はんど瓶」とは島根県大田市温泉津町で製造された陶器の瓶で、かつては味噌作りや水回りの道具として家庭で用いられ、肥溜めに使われたこともあったと聞く。この身近な暮らしの道具であった「はんど瓶」も「直江一式飾り」によく用いられ、特に馬の制作には不可欠な材料とされている。

表1は筆者が調査した2012年から2019年の「なおえ夏祭り」で飾られた馬が登場する作品の一覧で、この8年間に4町内合わせて12点の作品を飾っている。また、毎年いずれかの町内が馬の作品を飾り、2013年と2015年は2町内、2016年は3町内が揃って馬の作品を飾っている。

そこで、2016年の3町内の作品を見ると、共栄町は図16の「真田丸 死守! 大阪城」を飾ったのに対し、東本町は図17の「幸村出陣」を飾り、どちらの町内も前年に続けて「はんど瓶」で馬を造形している。この年はテレビの大河ドラマ「真田丸」が話題になったことで作品のテーマも重なり、共栄町は馬に乗った真田幸村が炎上する大阪城から出陣する場面を造形し、東本町は真田幸村が配下と共に3騎で出陣する場面を造形している。一方、図18の「輓曳競馬」を飾った相生町は、北海道の競馬で競走馬が重いそりを引いて障害を越える場面を造形し、3町内が馬の作品で競い合っている。

また、各町内の作品は、いずれも大型の「はんど瓶」を馬の頭や首、太ももに見立て、それを組み合わせて天井の梁から針金で吊り下げ、躍動感のある馬を造形している。こうした高度な技術は各町内で継承され、馬の制作が作り手の腕の見せ所となり、作品コンクールで高く評価されている。



図10 直江地区の「はんど瓶」(2017年 筆者撮影)

これに関し、毎回複数の馬を飾って馬の制作を得意とする東本町の角田彰氏(1953年生)は、「作品コンクールで各町内が盛んに競い合うようになってから、どの町内も陶器一式を使って作品を飾るようになり、さらに作品の飾り方も陶器を針金で天井から吊るすようになった」と語る。

前述のように原亀太郎氏が活躍した時代には、作品を「天井から針金で吊る」飾り方は見られず、「直江一式飾り」の競作が盛んになった結果、各町内の飾り手がより難しい材料や飾り方に挑戦し、重量のある「はんど瓶」を吊り下げる方法まで考案して、趣向の技術を進化させたと考えられる。

近年は直江でも「小さな皿などを貼り付ける方法」で作品を作る傾向が見られる一方で、大きな「はんど瓶」を組み合わせて馬を造形する方法は、「壺などの大きな材料をうまく組み合わせることで素朴・質素な中にその特徴や動き表情が誠にそれらしく飾られ」た原亀太郎氏の趣向の流れを汲み、「直江一式飾り」の伝統を継承して発展させたと見えよう。

表1 「なおえ夏祭り」で飾られた馬の作品一覧

	本町	共栄町	東本町	相生町
2012年	「与一の矢」			
2013年		「騎射」 (図11)		「流鏑馬」 (図12)
2014年			「秀吉軍の中国大返し」 (図13)	
2015年		「風林火山川中島の戦い」 (図14)	「隠岐馬入れ神事」 (図15)	
2016年		「真田丸 死守! 大阪城」 (図16)	「幸村出陣」 (図17)	「輓曳競馬」 (図18)
2017年				「流鏑馬神事」
2018年	「那須与一」			
2019年			「上賀茂神社」 (図19)	



図 11「騎射」(2013 年筆者撮影) 図 12「流鎧馬」(2013 年筆者撮影)

図 13「秀吉軍の中国大返し」(2014 年 筆者撮影)



図 14「風林火山 川中島の戦い」(2015 年 筆者撮影)

図 15「隠岐 馬入れ神事」(2015 年 筆者撮影)

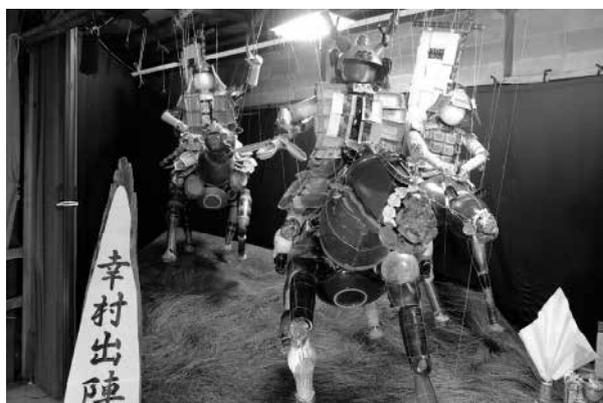


図 16「真田丸 死守! 大阪城」(2016 年 筆者撮影)

図 17「幸村出陣」(2016 年 筆者撮影)



図 18「輓曳競馬」(2016 年 筆者撮影)

図 19「上賀茂神社」(2019 年 筆者撮影)

IV. ハレの日を彩る「一式飾り」

出雲市の直江や平田と同様に「一式飾り」が地域に伝わる雲南市掛合町の糸賀新吉氏は、「直江一式飾り」を視察に訪れた際の印象を「一式飾りのすばらしさに驚嘆し夜店を楽しみながら歩く直江の街は、一瞬ではあるが自分を子供の頃に戻してくれ、とてもいい気持ちにさせてくれる」と記している¹⁷。

毎年7月17・18日に開催される「なおえ夏祭り」は、平日に開催されることになっても、通りの両側には沢山の屋台が立ち並び、近隣からも子どもや若者が大勢訪れて、直江の街は夏祭りを楽しむ観客で溢れる。また、祭日に離れた家族が集う家もあり、「なおえ夏祭り」は地域のハレの日の行事として、住民に長年親しまれている。

この「なおえ夏祭り」を、毎年賑やかな風景の作品で彩っているのが直江の万才町である。万才町は昭和の子どもの遊びをテーマに、大勢の子どもが登場する作品を飾り続けている。

図20から図27は2012年から2019年の8年間に万才町が飾った作品で、このうち図20の「昭和の遊び 竹馬」は、竹馬で遊ぶ子どもたちを造形している。これは「なおえ夏祭り」の実行委員会の会長を長く務めた万才町の石原正雄氏(1931年生)が、子どもの頃の懐かしい風景を再現した作品である。

こうした子どもが主人公の作品は、石原氏の引退後も万才町では後継の世代が引き継ぎ、図23の「キャンプファイヤー」はフォークダンスをする子ども、図25の「昭和の風景 縁側の夏」は花火で遊ぶ子ども、図27の「昭和の風景 井戸の恵み」は水鉄砲で遊ぶ子どもを造形している。

また、図21の「子供神輿」、図22の「七夕祭り」、図24の「金魚すくい」、図26の「昭和の風景 祭りの綿菓子」は、いずれも子どもたちが夏祭りを楽しむ姿を造形し、それは今も子どもで賑わう「なおえ夏祭り」の風景と重なって、作品コンクールで高く評価されている。しかし、たとえ評価の高い作品であっても、祭りが終われば作品はすべて解体される。

それを惜しむ声もあるが、直江一式飾り保存会の望月敏雄会長(1943年生)は『直江一式飾り』は秋葉さんへの奉納物であるから、祭りが終われば解体して元に戻さねばならない」と語り、また東本町の角田氏は『直江一式飾り』は花火のように刹那的」と語って、「一式飾り」は祭りの時にしか見られない特別なものという認識が、地域で共有されている。

これに関して、民俗芸能研究者の郡司正勝は「神は本ものの鬱陶しさを悦ばない。趣向という精神の

働きの喜びがないからである。神を迎える祭りの日には、人々は精いっぱい趣向を『見立』て、造り物をして、あっといわせる。神はこれを『風流』として受納する」と述べ、日本の祭りを彩る「造り物」は「見立という趣向の働きの肝心だから、形は偽物である。残してはならない。消えねばならない」、「祭りが終わったら、同時に解消するのが本義である」と指摘する¹⁸。

江戸時代の「造り物」の流れを汲む山陰の「一式飾り」もまた、神を迎える祭り、すなわちハレの日を彩る造形として、「見立て」の趣向を凝らした作品を祭りで飾り、祭りが終われば作品を残すことなく解体するのが習わしである。このように展示と解体を繰り返す「一式飾り」の習俗は、日常の暮らしとハレの日の違いを際立たせている。

これに関し、民俗学では「ハレとケ」という一対の概念を用いるが、民俗学研究者の宮田登によれば、ケは毎日のごくあたり前の生活であり、ケ＝「気」・「生きていく活力」とも考えられ、日常生活でケガレ＝「気枯れ」が生じると、ケガレを排除するために、ハレの日の祭りや行事が行われるとする¹⁹。

また、民俗学研究者の小松和彦によれば、ハレは日常の世界(ケ)から離脱し、別のリアリティの世界に遊び、そこで日頃蓄積してきたケガレを祓い浄めて、別の段階の社会生活に移行したり、再び元のケの生活に復帰したりすると考えられ、ハレの日の典型である祭りは「娯楽の場」であると同時に「人と人との交流の場」や「共同体意識の強化・確認の場」であるとする²⁰。

換言すれば、ハレの日の祭りとは、暮らしの中で日常とは別の世界に遊ぶ時間と空間であり、その非日常の世界に遊ぶために、生活道具を見立てて「一式飾り」を飾ると言える。そして、祭りで住民が協同して飾る「一式飾り」は、単なる娯楽ではなく、人と人との交流を深めて地域の結束力を強め、日常生活に活力を生み出す効果がある。

実際に直江では、コロナ禍で「なおえ夏祭り」が中止となる中、各町内の代表が集まって図8のオロチ退治の作品を飾り、自粛の日々を過ごす地域の人々を元気づけている。これは「一式飾り」の伝統を続けることが、地域共同体の持続と一体であることを物語っている。

江戸時代の狂歌師・鬼拉亭力丸が「作物てふたはふれなくては、ともし火にあふらのなきに似たり」(作り物という戯れがなければ、油のない灯火のようだ)と綴った「造り物」に対する熱い想いは²¹、今も山陰の「一式飾り」に息づいていると言えよう。



図 20 「昭和の遊び 竹馬」(2012年 筆者撮影)



図 21 「子供神輿」(2013年 筆者撮影)



図 22 「七夕祭り」(2014年 筆者撮影)



図 23 「キャンプファイヤー」(2015年 筆者撮影)



図 24 「金魚すくい」(2016年 筆者撮影)



図 25 「昭和の風景 縁側の夏」(2017年 筆者撮影)



図 26 「昭和の風景 祭りの綿菓子」(2018年 筆者撮影)



図 27 「井戸の恵み」(2019年 筆者撮影)

謝辞

フィールドワークに際し、多大なご支援とご教示を賜った直江一式飾り保存会と同会長の望月敏雄氏、万才町の石原正雄氏、東本町の角田彰氏に、心より御礼申し上げます。また、鳥取大学の教育研究プロジェクト(戦略3-1)「山陰の地域課題研究を通じた人口希薄化社会の新たな価値発見・創造のための教育研究プログラム」の一環として、ご支援頂いている鳥取大学地域価値創造機構に、感謝申し上げます。

注

- 1 山陰の「一式飾り」と西日本各地の「造り物」・「飾り物」については、拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗(1)―鳥取県南部町法勝寺地区を事例として―」『地域学論集』第17巻第2号、鳥取大学地域学部、2020年、拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗(2)―島根県出雲市平田町を事例として―」『地域学論集』第17巻第3号、同、2021年、並びに以下の研究調査報告書を参照されたい。『「一式飾り」調査報告Ⅰ 若者の視点から見た「一式飾り」』鳥取大学地域学部高橋健司研究室、2014年、『「一式飾り」調査報告Ⅱ 地域教育を通じた「一式飾り」の継承』同、2015年、『「一式飾り」調査報告Ⅲ「見立て遊び」の伝統の継承』同、2016年、『「一式飾り」調査報告Ⅳ「一式飾り」の価値の探究と継承』同、2017年、『「一式飾り」調査報告Ⅴ「一式飾り」に見る伝統の持続性』同、2018年、『「一式飾り」調査報告Ⅵ「一式飾り」に見る「見立て」の創造性』同、2019年、『「一式飾り」調査報告Ⅶ「一式飾り」に見る「風流」の伝統』同、2020年、『「一式飾り」調査報告Ⅷ コロナ下における「一式飾り」』同、2021年。
- 2 「直江一式飾り保存会だより」の「直江一式飾りの由来記」に記載。江角屋善助が人形を飾った年代は不明。
- 3 東伯寺のパンフレット「直江町 秋葉大権現 伝承記」に記載。
- 4 山陰の「一式飾り」は、江戸時代の「造り物」を描いた絵本『造物趣向種』(天明7年版、天保8年版、安政7年版、明治の復刻版)を手本にして作品を制作したと考えられる。『造物趣向種』は島根県内には残されていないが、鳥取県南部町には現存し、近年まで「法勝寺一式飾り」の制作に利用していた。
- 5 一式飾り保存会広報部「直江一式飾り今昔(2)」『なおえ公民館報』直江公民館、1994年。
- 6 同上。
- 7 原亀太郎氏の没後の1973年頃に、原氏が「直江一式飾り」の発展に多大な貢献をしたことを称えて「原亀太郎賞」が設けられ、同賞は作品コンクールで優秀な作品に授与されている。
- 8 小玉元一「直江一式飾り今昔」『なおえ公民館報』直江公民館、1993年。
- 9 同上。
- 10 「平田一式飾り」の中興の祖とされる千把雲陽氏(1889年～1975年)も、日本国内のみならず植民地であった朝鮮まで出向いて「一式飾り」を飾ったと伝わる。
- 11 直江の東南町は2018年から「一式飾り」の制作・展示を休止し、現在は11町内が作品を飾っている。
- 12 作品審査は、作品を飾る町内のみならず周辺の町内を含めた27の町内会の会長が行っている。
- 13 直江一式飾り保存会は、毎年地元の出雲市立中部小学校で「ミニ一式飾り」を制作する授業を行い、小学生が作った「ミニ一式飾り」の作品は、「なおえ夏祭り」の展示コーナーに飾られて好評を博している。
- 14 2015年7月20・21日に出雲市平田町で開催された平田天満宮祭礼でも、陶器一式の「孫悟空」が飾られ、逆さにしたカエルの置物を孫悟空の顔に見立てている。また2015年8月20日に雲南市掛合町で開催された掛合恵比寿祭りでも、同様の「孫悟空」が飾られている。こうした陶器のカエルを見立てる趣向は、島根の3地域の「一式飾り」に共通して見られ、広く人気がある。なお「平田一式飾り」の「孫悟空」については、前掲の拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗(2)―島根県出雲市平田町を事例として―」を参照されたい。
- 15 2014年の平田天満宮祭礼でも、話題のアニメ映画「アナと雪の女王」をテーマにした作品が飾られ、陶器のカエルの置物を組み合わせてトナカイの顔に見立てている。詳しくは拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗(2)―島根県出雲市平田町を事例として―」を参照されたい。
- 16 「平田一式飾り」でも陶器のカエルをオロチ(龍)の頭に見立てているが、カエルの用い方には違いが見られる。拙稿「山陰に息づく『一式飾り』の習俗(2)―島根県出雲市平田町を事例として―」では、平田の龍の作り方を紹介しているので参照されたい。
- 17 糸賀新吉『「祭り」について想うこと』『なおえ公民館報』直江公民館、1994年。
- 18 郡司正勝「山と雲―風流の図像誌―」『郡司正勝刪定集 第六巻』白水社、1992年、180―181頁。
- 19 宮田登「ハレ・ケ・ケガレ」イベント研究会編『イベント辞典』産業調査会 辞典出版センター、1990年、444頁。
- 20 小松和彦「神なき時代の祝祭空間」小松和彦編『現代の世相⑤ 祭りとイベント』小学館、1997年、9頁、37頁。
- 21 鬼拉亭力丸「序」鬼拉亭力丸編・松川半山画『四季 造物趣向種』河内屋藤兵衛ほか出版、1837年(天保8年)。